

変わりゆく富士信仰

近世の巡礼者たち：巡拝

15世紀後半には、すでに多くの一般巡礼者が富士山に登るようになっていました。17世紀初頭、数百年にわたって日本を苛んでいた戦乱が終結し、徳川幕府（1603–1868）が開かれました。平和は国中の人々に繁栄をもたらし、霊験あらたかとされていた信仰的な慣習に観光を組み合わせる手段として、全国各地への巡礼が人気を博しました。18世紀になると、富士山を崇拜し、霊峰・富士への巡礼を取りまとめる「富士講」と呼ばれる団体が数多く組織されました。

富士講の中心地であった江戸（現在の東京）には、808の界隈それぞれに1つの富士講があったと言われています（おそらく誇張ではあるものの、数百の富士講があったのは確かです）。この流行は江戸から関東地方全域へと放射状に広がっていきました。富士講は定期的に会合を開き、各講社は毎年登山の季節に代表者数名を富士巡礼へと送り出しました。それぞれの講社と繋がりのあった「御師」と呼ばれる富士山麓の信仰指導者は、富士講の参詣者に宿泊施設や物資を提供し、富士山登拝の案内役を務めました。

時代の経過とともに、富士講の巡礼者は異なる崇拜の形を生み出しました。登拝に加え、御中道沿いに富士山中腹の周囲を一周するものもいれば、8つの湖沼を巡ってそれぞれで水垢離を行う八海巡りをするものもありました。信仰の実践の一形態としてこれらのルートを踏破することは「巡拝」と呼ばれました。